

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：21201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00554

研究課題名(和文) 可能動詞化の方言横断的多様性とその知識の獲得に関する理論的・実証的研究

研究課題名(英文) The Morphosyntax of RARE and Potential Predicates in Tohoku Dialects

研究代表者

高橋 英也 (Takahashi, Hideya)

岩手県立大学・私立大学の部局等・准教授

研究者番号：90312636

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語のヴォイス形式におけるRAREの方言多様性について、文法構造における機能範疇の役割という観点から考察を行った。特に、共通日本語と東北方言の差異に焦点を当て、(i) 可能・受動を具現するレ/re/とラレ/rare/を構成する形態素として/r/, /a/, /e/の存在を仮定し、分散形態論の枠組みの下で、その形態統語的役割について提案を行った。同時に、伝統的な自発起源説の洞察に基づき、可能と受動にまたがるRAREの統一的な形態統語分析を提示した。また、RAREの形態統語派生に関する理論的考察から得られる予測や帰結について、質問紙調査や聞き取りによる実証的研究による検証を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、東北方言のヴォイス述語の形態統語派生を理論的・実証的な見地から精査し、方言多様性を保証し共通日本語との差異をもたらす文法的要因を明らかにすることを試みた。ヴォイスは言語研究において中心的テーマの一つであり、先行研究による膨大な知見の蓄積がある。しかし、先行研究では、受動ラレ・使役サセのように、ヴォイス形式を形態素との単純な対応において捉えるタクソノミー的分析がほぼ例外なく援用されてきた。本研究は、方言文法の多様な可能・受動形式について、それぞれが独立した特別な形態素などではなく、むしろ、原理的に利用可能な構成要素間の組み合わせ原理の帰結として捉え直すことができることを示した。

研究成果の概要(英文)：This study has put forward a novel approach to the formation of /rare/ in potential and passive constructions in Japanese, which claims that /rare/ is not a single morpheme and needs to be decomposed into an array of distinct formatives /r/, /a/, and /e/. Specifically, we argue under the framework of Distributed Morphology (Marantz 1997, 2001, among many others) that the distribution of those formatives is determined in terms of the configurational vP structure. We have also shown that our analysis is empirically motivated by facts from dialectal variations on potential and passive predicates spoken in dialects in Tohoku region.

研究分野：言語学

キーワード：日本語 東北方言 形態統語論 分散形態論 ヴォイス 可能動詞 受動態

1. 研究開始当初の背景

1990年代初頭以降、動詞機能範疇の階層性に関して様々な提案がなされてきたが、一致した見解には未だ至っていない。関連して、分散形態論の枠組みに立脚すると、日本語述語が示す膠着性を動詞機能範疇の階層性に還元する方向性が大いに示唆されるが、やはりここでも課題は多い。その中で、いわゆる RARE が主動詞に付加することで派生される可能述語・受動述語については、生成文法の伝統において、形態辞 *(r)are/(r)e* を主要部とする複文構造が広く想定されてきた。他方、(i)RARE の 2 つの異形態の文法的差異、(ii) (可能述語におけるラ抜き言葉や東北方言におけるラルによる「短形」受動述語を含む) RARE の方言多様性、さらに、(iii) 可能文・受動文の母語話者による獲得過程といった RARE の文法の諸相に広く目を配った統合的研究は、ほぼ皆無であったといえる。

2. 研究の目的

本研究は、ヴォイス関連領域である可能・受動において具現する RARE の形態統語論に焦点を当て、上記 3 つの観点から多角的にアプローチすることによって、その内実を明らかにすることを目的として実施された。特に、可能・受動 RARE はそれ自身が単独の形態辞ではなく、一連の独立した形態素 *r*, *a*, *e* に分解されるとの作業仮説を立て、その妥当性を、動詞句構造の階層性に関する理論研究、また、RARE を産出する文法知識の獲得に関する実証研究との連携を通して検証することを目指した。さらに、本研究のもたらす帰結として、自然言語の階層性に関する一般理論の構築についても考察することとした。

3. 研究の方法

本研究の実施にあたっては、2 つに大別される個別研究課題の成果を相互参照し、研究全体としての一貫性に配慮しながら、最終的な研究目的の達成を目指した。

【A. 可能・受動 RARE の形態統語論】

当該研究課題では、可能・受動 RARE の文法について、補文構造による伝統的な統語分析における洞察を分散形態論の下で捉え直すことを試みた。特に、*(r)are* の語彙分解により仮定される形態素 *r*, *a*, *e* の接辞としての表出が、動詞機能範疇の階層性、そしてそれと対応する意味論の相関からいかに導出されるのかについて、理論的に考察した。具体的には、活用語尾・挿入母音としての *a*、母音連鎖を避けるなど音声表出上の要求により挿入されるデフォルトの子音としての *r*、といった伝統的な見方に反して、両者ともに特定の機能範疇に生起する統語的機能辞として実体が備わるものと仮定し、同時に、伝統的に「両極の *e*」とも呼ばれてきた接辞 *e* について、いわゆる「得る=GET」説に立脚した分析を追求することで、可能・受動 RARE の形態統語論、V-e-te-iru 形式が示す「結果」「進行」のアスペクト解釈、さらに外来語名詞由来のラ行五段動詞派生について、統一的視座に立った検討を行った。

【B. 可能動詞の方言多様性に関する研究】

当該研究課題では、可能動詞化における方言上の多様性として、「読めえねえ/yom-e-e-nai/」のような、岩手県宮古市方言における能力可能「エ足す言葉」を取り上げ、それを容認する方言話者がどのような文法メカニズムにより当該述語形式を産出・処理するのかを明らかにすることを目指し、「ラ抜き言葉 (例: 寝れん/ne-re-n/)」「レ足す言葉 (例: 寝れれん ne-re-re-n)」といった他方言における可能動詞化との比較検討を行った。

4. 研究成果

本研究の成果の一部は以下の発表論文および調査報告において公表された。

- (1) Takahashi Hideya and Kensuke, Emura. 2019. The Syntax of Potential Verbs in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics 90: Proceedings of the 14th Workshop on Altaic Formal Linguistics*.
- (2) 高橋英也・江村健介. 2019. 「V-e-te-i-ru 形式のアスペクト解釈について」口頭発表. 日本語学会第 159 回大会.
- (3) 高橋英也・中島崇. 2020. 「受け身「ラレ」の形態分離と繫属述語仮説」*JELS 37*. 日本英語学会.
- (4) Takahashi Hideya. 2020. Short Passives in Tohoku Dialects. Paper Presented at Workshop on Morphosyntax and Language Universals (Nanzan University).
- (5) Takahashi Hideya and Kensuke, Emura. 2020. Short Passives in Japanese Dialects. Paper Presented at the 28th Japanese/Korean Linguistics Conference.
- (6) 高橋英也. 2021. 「東北方言における自発・可能・受け身のラル/ラレル/ラサル」口頭発表. 日韓語の音韻論・統語形態論ワークショップ (オンライン)

- (7) Takahashi Hideya. 2021. On the Acquisition of Potential Verbs and Conjugation Types of Verbs in Japanese. *Open Linguistics* 7-1: 17-34.
- (8) Nakajima Takashi and Hideya, Takahashi. 2021. Inceptive Head and the Split Little *v* Hypothesis. Paper Presented at Morphology and Lexicon Forum 2021.
- (9) Takahashi, Hideya 2022. On the Role of Little *v* in Japanese Verbal Morphology. *Liberal Arts* 16: 97-102.
- (10) 江村健介. 2022. 「岩手県宮古市方言の能力可能述語の形成における形態統語的制約」報告書 (未刊行). 岩手県立大学.

第一に、(1)(3)(7)では、可能・受動(*v*are)に対する語彙分解アプローチの指針の下、(i) *e* は、「得る=GET」が文法化した機能範疇 Get として、その指定部に Experiencer, Affectee など多様な意味役割を認可し、(ii) (*v*)ar は、出現・発生を表す動詞「生=アル」の文法化を出自とし、独立した形態素 *r* と *a* の連携による非対格構造を持つ機能辞連鎖 InchoativeP を成すことを提案した。また、伝統的な分類における3種類の日本語受動文(直接、所有、間接)に対する統一的分析を提示した。

第二に、成果(4)(5)では、福島方言と岩手方言の(*v*)ar 述語形式に見られる可能・(短形)受動の多義性、ならびに受動文の主語に課せられる生物性制約について、上述の可能・受動述語(*v*are)に対する語彙分解アプローチに基づき検討を行った。特に、分散形態論における語彙挿入では「同一の述語形態は同一の動詞主要部における音形具現の反映である」とも仮定し、共通日本語における(*v*are)に対して、相対的に「短形」とも呼ぶことのできる当該方言の(*v*)ar は、(i) 事態の出現・発生を表す本動詞アルの文法化に由来する *v*[GO]の具現で、(ii) 派生元の動詞が潜在的に内包するアスペクト的限界点を顕在化させるとの分析を提示した。さらに、アスペクト的限界性(開始限界と終了限界)の概念に基づき、可能と受動は開始限界点と終了限界点を伴うイベント性(GO)により区別されることを提案した。結果として、福島方言と岩手方言の受動文が示す主語の生物性制約と受動形態における相関(非情物主語+直接受動(*v*)arによる短形受動文と、有情物主語+間接受動(*v*are)の差異)に対して、形態統語的分析を与えた。

成果(6)では、岩手方言における3種類の可能形式「ラル/ラレル/ラサル」について検討し、それらが互いに示す共通点や差異が、(*v*are)に対する語彙分解アプローチから自然に導出されることを論じた。具体的には、(*v*)ar が具現し Inchoative 構造を内包する機能範疇 InchoativeP は、統語派生の過程で Root, *v*, Voive いずれをも選択できるという点で、動詞句階層において分散して分布可能であることを提案した。また、この提案の帰結として、自発から可能や受動への連続性(自発起源説)が自然に扱えられることを論じた。

次に、成果(2)では、可能動詞+テイルのアスペクト解釈に関する先行研究の観察を踏まえ、派生接辞としての *e* を介した可能動詞化から自他交替への連続性とその意味論的側面について検討を行った。特に、動詞句階層において、Get 主要部として具現する *e* が VoiceP を選択すると仮定することで、事象構造における「過程 (process)」と「結果 (result)」の領域が形態統語的に独立して意味論に写像すること、そして、テイル形の解釈がそのスコープ内にある *v*P と GetP の「可視性」により決まることを提案した。

成果(8)(9)では、「コピる」「宿る」など、日本語における名詞由来派生動詞を取り上げ、ある種の語根が機能範疇との併合 (Merge) の適用に対して可視的となるために独立した操作を必要とする可能性について検討を行った。特に、名詞由来派生動詞においてラ行五段化が具現する動詞化素 *r* と、その未然形の活用語尾 *a* について再定式化を試み、否定と受動に接続する *a* は「出来」という意味概念の下で無理なく統合されることを論じた。具体的には、*a* を統語的な機能辞と見なし、意味的には行為/イベントの「出来」を表すものと仮定した。この仮定により、例えば「泣く」に基づく「泣かない/nak-a-nai/」については、従来の「未然形」という呼称が誤解を生みやすいものであるのに対して、「泣く行為の出来の否定」として新たに捉え直すことが可能であることを論じた。同様に未然形接続である受動述語「太郎が妹に泣かれる/nak-a-r-e-ru/」における *a* も、受動文のイベント構造において基底/背後に存在する下位イベント「妹が泣く」の出来、を表すと見ることができると論じた。本研究は、*a* を単なる活用語尾のような挿入母音と見なす従来の分析とは大きく異なる。また、日本語における流音 *r* の分布については、音声表出上の要求により挿入されるデフォルトの子音ではなく、名詞語根を統語的対象物(syntactic object: SO)に変換する機能辞 Inceptive Head の具現であると見なし、ラ行五段化を形態統語現象として捉える可能性を示唆した。

最後に、新型コロナウイルスの感染拡大の事情により、研究期間の全体にわたって対面での質問紙調査など実証的研究は、実施自体が概して困難であった。そのような状況下において、R3年度の12月に、感染予防対策を徹底しながら、岩手県宮古市および周辺地域出身の日本人大学生21名をインフォーマントとして、「読めえねえ/yom-e-e-nai/」のような、岩手県宮古市方言における能力可能「エ足す言葉」の容認性に関する質問紙調査が実施できた。具体的には、自他交替が接辞 *ar*e の対により具現するタイプの動詞(曲がる/曲げる)と、形態的に無標の自動詞に接辞 *e* が後接することで他動詞が具現するタイプの動詞(立つ/立てる)を例文としてリスト化し、エ足す言葉が表す可能の意味の強調の程度と容認性について、五段階評価に基づく調査を行った。その結果として、(i) 「エ足す言葉」における二重付加の接辞 *e* が、動詞の形態統語タイプを

問わず「可能形の強調」として機能している一方で、(ii) エ足す言葉の形成は一樣ではなく、その形成可能性が自他交替における形態的示唆性に影響されることが明らかになった。具体的には、接辞 *arte* により具現するタイプの動詞のエ足す言葉の形成が、他動詞形においてのみ接辞 *e* が具現するタイプの動詞に比べて容易であることが示された。これは、本研究者が過去に発表した、東海地方における可能述語形式として優勢な「ラ抜き言葉 (例：寝れん/*ne-re-n*/)」や「レ足す言葉 (例：寝れれん *ne-re-re-n*)」の形成と動詞タイプの相関とも符合するという点で非常に興味深い結果となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Hideya Takahashi	4. 巻 16
2. 論文標題 On the Role of Little v in Japanese Verbal Morphology	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Liberal Arts	6. 最初と最後の頁 97-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hideya Takahashi	4. 巻 16
2. 論文標題 On the Role of Little v in Japanese Verbal Morphology	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Liberal Arts	6. 最初と最後の頁 97-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hideya Takahashi	4. 巻 7
2. 論文標題 On the acquisition of potential verbs and conjugation types of verbs in Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Open Linguistics	6. 最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/opli-2021-0002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Takahashi, Hideya and Kensuke Emura	4. 巻 90
2. 論文標題 The Syntax of Potential Verbs in Japanese	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 MIT Working Papers in Linguistics	6. 最初と最後の頁 317-328
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 高橋英也・中島崇	4. 巻 37
2. 論文標題 受け身「ラレ」の語彙分解と繫属述語仮説	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 100-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Nakajima, Takashi and Hideya Takahashi
2. 発表標題 Inceptive Head and the Split Little v Hypothesis
3. 学会等名 Morphology and Lexicon Forum 2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nakajima, Takashi and Hideya Takahashi
2. 発表標題 Inceptive Head and the Split Little v Hypothesis
3. 学会等名 Morphology and Lexicon Forum 2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hideya Takahashi and Kensuke Emura
2. 発表標題 Short Passives in Japanese Dialects
3. 学会等名 The 28th Japanese/Korean Linguistics Conference (virtual) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋英也
2. 発表標題 東北方言における自発・可能・受け身のラル/ラレル/ラサル
3. 学会等名 日韓語の音韻論・統語形態論ワークショップ(オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋英也・中島崇
2. 発表標題 受け身「ラレ」の語彙分解と繫属述語仮説
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋英也・江村健介
2. 発表標題 V-e-te-i-ru形式のAspect解釈について
3. 学会等名 日本言語学会第159回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takahashi, Hideya
2. 発表標題 Short Passives in Tohoku Dialects
3. 学会等名 Workshop on Morphosyntax and Language Universals(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	江村 健介 (Emura Kensuke) (60757128)	岩手県立大学・公私立大学の部局等・講師 (21201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------